

〈書評〉

Oswald Ducrot et Jean-Marie Schaeffer
*Nouveau dictionnaire encyclopédique
des sciences du langage*

Editions du Seuil, 1995.

喜 田 浩 平

本書は、1972年に Seuil 社から出版された同名の著書の改訂増補版である（以下では便宜上、本書を「新版」、1972年のものを「旧版」と略記する）。旧版の著者は Oswald Ducrot と Tzvetan Todorov であったが、後者の担当していた部分を新版では Jean-Marie Schaeffer が引き継いでいる（どのような理由によるかは不明）。ただし Todorov の筆になる記述も、部分的に残されている。また中心になる執筆者に加えて執筆協力者がいるが、それも変更されている。旧版では Maria-Scania de Schonen, Marie-Christine Hazaël-Massieux, François Wahl が参加していたが、新版ではこれが一新され、Marielle Abrioux, Dominique Bassano, Georges Boulakia, Michel de Fornel, Phillipe Roussin が参加している（ちなみに評者の知る限りで、Bassano は心理言語学、Fornel は会話分析の専門家である）。

旧版と比べて変わったところはいくつかある。まず旧版になかった項目がいくつかつけ加えられている（例えば「*Etudes littéraires*」「*Analyse de conversation*」「*Narratologie*」「*Modularité*」「*Anaphore*」など）。また旧版の項目名をそのまま踏襲しながらも内容が大幅に変わっているものもある（例えば「*Poétique*」「*Sémiotique*」「*Enonciation*」など）。更に、旧版では一つの項目にまとめられていたものが二つの項目に分割され、それだけ記述が詳しくなっているものもある（例えば旧版では「*Rhétorique et stylistique*」「*Temps et modalité dans la langue*」であったものが、新版では「*Rhétorique*」「*Stylistique*」「*Temps dans la langue*」「*Modalité dans la langue*」に分割されている）。全体として量が増え、旧版の総ページ数が約470ページだったのに対し、新版は約670ページに膨れ上がっている。内容の方も、新しい項目が書き下ろしであるのはいくつまでもないが、改訂された項目も大幅に修正されており、評者の印象では全く新しい著書といってもいい程である。

しかし本書の特色である基本方針は変わっていない。まず広い意味での「言語科学」を視野に収めていること（タイトルの「*sciences*」が複数形であるのはこのため）。狭義の「言語学」だけではなく、文学理論や批評の方法論なども扱われている。また事項の配列がアルファベット順ではなくテーマ別であること（この点、Jean Dubois *et al.*, *Dictionnaire de linguistique et des sciences du langage*, Larousse, 1994 や Georges Mounin, *Dictionnaire de la linguistique*, P.U.F., 1974 とは異なる）。更に、狭義の言語学関係の項目に限定していえば、「意味」に関するテーマ

が圧倒的に多いこと（音韻論，音声学，形態論，統語論よりも意味論や語用論の諸問題に比重が置かれている）。そして，公平無私の客観的視点からの記述ではなく，執筆者の個人的見解がかなり介入していること（もちろん，全く恣意的な内容というわけではないが）。評者の専門とする言語学関係の項目を中心に，この点を確認してみたい。

この傾向が最も顕著なのは，« Enonciation » の項目である（旧版では Todorov が担当していたが，新版では Ducrot が担当している）。Ducrot はこのコンセプトを「発話が生み出されること，すなわち文が具体化されることによって構成される歴史的事実」（新版603ページ）と定義する。また Ducrot は，発話の産出を規定する様々な社会的・心理的条件を捨象し，純粋に発話が生み出される「事実」だけを énonciation と呼ぶ（同ページ）。ちなみにこの定義は，Ducrot の他の研究（*Les Mots du discours*, Editions de Minuit, 1980, « Analyses pragmatiques », in *Communications*, 32, 1980, *Le Dire et le dit*, Editions de Minuit, 1984, また *Encyclopædia Universalis* で Ducrot が担当した « Enonciation » の項目など）で提案されているものと一致する。少し敷衍しておくが，Ducrot にとって「文 (phrase)」とは抽象的な（理論上の仮説としての）実体である。また「発話 (énoncé)」とは文が具体的な状況で使われることによって生み出されるものである（つまり文は type として，また発話は token あるいは occurrence としての性格を持つ）。従って，例えば *Il fait beau* という文が異なる話者によって使われる場合，また同じ話者が異なる状況で使う場合，それぞれ異なる発話が生み出されることになる。これに対して énonciation は文が使われる（発話として具体化される）事実そのもののことである。文を使った結果生み出された「もの」が発話で，そのように使う「こと」が énonciation である。従って「使用 (emploi あるいは utilisation)」との関連で捉えるべきコンセプトであり，日本語に訳すならば「発話事実」とするのが適当かと思われる（énonciation は「発話行為」と訳されることもあるが，Ducrot の定義の訳語としては誤解を招く恐れがある）。またこの意味での énonciation を英語に訳すと utterance が最も近いと思われるが，これは同時に énoncé の訳語にも使われるので（英語のこのコンセプトは Ducrot の énoncé と énonciation を区別しない），あまり適切ではない。

Ducrot の « Enonciation » の項目には二つの特徴がある。一つは，他の定義との比較がないことである。フランスの言語研究で極めて重要な位置を占める（英語圏の言語研究における「語用論 (pragmatics)」とは似て異なるものである）このコンセプトは，研究者によって様々な意味づけがなされており，その全てを学説史的に概観するなら，まず先駆者である Charles Bally (*Linguistique générale et linguistique française*, 4^e édition, Berne, Francke, 1965) や Emile Benveniste (*Problèmes de linguistique générale*, 1, Gallimard, 1966) についての言及が不可欠であろう。しかし Ducrot はあえてそれをしない。いったいどうしてだろうか。もし客観的視点から学界の「通説」を述べ，基本的コンセプトを最大公約数的に定義することが望ましい事典の姿であるとするならば，本書は最初からそれを放棄している。

もう一つの特徴は，定義が極めて言語的なものに限定されていることである。文の使用の社会的・心理的側面を切り捨て，純粋に事実に側面だけを énonciation と呼ぶのは既に見た。これは

他の研究者の定義と大きく異なる。まず Dubois らの定義——おそらく最も人口に膾炙したものであろう——によると、*énonciation* は一つ一つの発話を生み出す個別の「行為」のことである（前掲書参照）。「行為」というからには、社会学的・心理学的側面を抜きにして語ることはできない。また Antoine Culioli にとって *énonciation* は認知的・心理的性格の極めて濃厚なコンセプトである（*Pour une linguistique de l'énonciation*, Ophrys, 1990）。更に Catherine Kerbrat-Orecchioni は、話者の「主観性（subjectivité）」が刻印された発話をすべて *énonciation* の現象として扱おうとしている（*L'Énonciation : de la subjectivité dans le langage*, Armand Colin, 1980）。そして Todorov は、*énonciation* を「発話状況（situation de discours）」とほぼ同義に使い、そこには発話の産出を規定する雑多な要素が混在している（旧版405ページ）。これに対して Ducrot は、あくまでも *énonciation* の言語的側面にこだわる。

Ducrot はなぜこのような定義を採用するのだろうか。もちろんそれが「言葉の定義（*definitio nominis*）」（『ポール・ロワイヤル論理学』第5版第1部第12章参照）であるならば、定義する者の恣意に全面的に依存すること自体は一向に差し支えない。しかし無数にある定義の中からこのような定義を選ぶ積極的理由は何だろうか。Ducrot の経歴を知る者であれば、二つ目の特徴（*énonciation* の言語的側面を強調する）に関して、その遠因として、Ducrot 自身が構造主義の全盛期を経験した世代であり、「言語は、固有の秩序をもったシステムである」（Saussure）との確信があるからであろうと推測するかもしれない（Seuil 社の共著 *Qu'est ce que le structuralisme?* で Ducrot は「*Le structuralisme en linguistique*」と題する章を担当した）。確かに、Ducrot の業績の総体を眺めると、このような信念に貫かれていることは間違いないといえる。しかしそれに尽きるだろうか。

そこには、おそらく本書の執筆方針の根幹に関わる理由があるのではないかと思う。具体的には、本書の目的が、情報を提供することにあるのではなく、問題を提起することにあるため、上記のような書き方が生まれたのだと思われる。「*Énonciation*」の項目で様々な学説を紹介し比較することはそれほど興味深いことではない。重要なのは、このコンセプトを導入することで何ができるかということである。

Ducrot の定義する意味での *énonciation* のコンセプトによって、従来指摘されることのなかった様々な現象が見えてくる。多くの場合、*énonciation* のコンセプトで捉えられる現象は、せいぜい「転位語（*embrayeur*）」すなわち *je, ici, maintenant* など、状況によって指示対象が変化する表現だけである。Ducrot ももちろんこの現象を扱っているが、それ以外の現象に多くのページが割かれているのが独創的である。例えば、副詞（的表現）の分類に新しい視点が生まれる。一群の副詞的表現（*sincèrement, entre nous* など）には、発話の内容ではなく、発話の事実そのもの（すなわち *énonciation*）を修飾する用法があることが明らかになる（「*Sincèrement, Pierre est venu*」では「ピエールが来たこと」が *sincère* なのではなく、「『ピエールが来た』と私が発話すること」が *sincère* である）。また感嘆文・間投詞も今までと違った見方ができる。「*Ce qu'il fait chaud!*」のような感嘆文の特徴はなんだろうか。「暑さの程度が甚だしいことを伝える」という記述では不十分である。なぜなら、「*Il fait très chaud*」も「暑さの程度が甚だしい」こ

とを意味し、区別がつかないからである。ここでも「発話事実」としての *énonciation* が役に立つ。感嘆文の特徴は、発話の内容ではなく *énonciation* にある種のイメージを与えることにある。感嘆文は、その発話事実そのものに特別な理由（感動、不満、驚異など）が存在することを含意する。平叙文にはこのような機能がない（あるとしても間接的である）。更に、「句派生 (*délocutif*)」の現象を一般化できる。Benveniste（前掲書）は *salut* から派生した *saluer* などの動詞を「句派生動詞」と呼んだが、このような派生関係は動詞に限定されない。例えば *diable* から *diablement* への派生なども同様の現象である。その特徴は、X から Y が派生する場合、X の意味内容からではなく、その *énonciation* から派生することである。*maison* から *maisonnette* への派生には *maison* の意味が関与するが、*salut* から *saluer* への派生には前者の意味そのものではなく、それを「*Salut!*」と発話する場合の *énonciation* が関与する。同様に、*diablement* も、*diable* の意味そのものではなく、「*Diable!*」という発話の *énonciation* から派生する。

このような現象は、例えば Dubois らの事典では全く触れられていない。これに対して Ducrot の事典の読者は、*énonciation* というコンセプト一つをとっても様々な現象が関わってくること、様々な問題が引き出せること、などを知ることができる。また、このコンセプトを使って、Ducrot の指摘するもの以外にどんな現象が記述できるか探してみようという気にもさせられるのではないだろうか。（ちなみに、本書の「*Enonciation*」の項目では触れられていないが、Ducrot がこのコンセプトとの関連で論じる問題に、「論証 (*argumentation*)」や「ポリフォニー (*polyphonie*)」，またいわゆる「言語行為」などがある。）

以上のような特徴は、「*Enonciation*」の項目に固有のものではない。ほとんど全てが同じような調子で書かれている。従って、本書は「参照する」ための事典というよりは「読む」ための事典といった方が正確であろう。それゆえ、初学者や専門外の研究者が予備知識なしで参照するのは危険が伴うかもしれない。（これは未確認の情報であるが、バリの某大学の言語学科では、Dubois の言語学事典は参考図書として推薦されているが、本書は「有害」図書に選定されている由。またこれも未確認の情報だが、*Le Monde* の書評で、本書は客観的な「事典」ではなく「Ducrot 理論の概説書」にすぎないとして痛烈な批判が向けられた由。ただし評者が目を通すことのできた1995年9月21日付 *Libération* 紙の書評では、3 ページにわたる特集で好意的に紹介されていた。）むしろ言語学の事典はしかじかであるべきだとの先入観をいったん取り払って、そこに書かれていることそのものを楽しむような読み方をするようお勧めしたい。

「Ducrot のやっていることは言語学ではない」という批判を耳にしたことがある。確かに、狭義の「言語学」ではないかもしれない。高等師範学校で哲学を学びそのアグレガシオンを取得し、また英米の言語哲学 (Austin, Searle, Strawson) と数理論理学の研究から言語の問題に興味を持ち始めたという経歴の持ち主としては、「言語学者」という呼称は相応しくないかもしれない。また Jakobson や Benveniste のような言語学者が揃って多言語使用者であったのに比べ、Ducrot はそれほど多くの言語に通じているわけではない（母語のフランス語を除いては、英語、ドイツ語、スペイン語、古代ギリシア・ラテン語を読むのには苦勞しないが、喋れる外国語はせいぜいポルトガル語だけという由）。しかしまさにそれゆえに、「言語学者」とは違う視点から言

語について語れるという特権があるのではないだろうか。経験科学としての言語学の目的が「事実」を集積することにあるとするなら、Ducrot の関心はむしろ言語について語るための道具としてのコンセプトを提供することにあるといっていよう。ただし、単にコンセプトをそれ自体においてもてあそぶことが目的ではなく、あくまでも「事実」を「構築」する——「発見」ではない——ためのコンセプトを作り出すことを目指している。

本書の言語学関係の項目に「言語学」についての説明ではなく言語（とりわけ「意味」）についての深い洞察を期待するなら、また客観的な情報（「通説」，「常識」）ではなく一つの独創的な見解を期待するなら、そして問題を解決することよりも問題を見つけることに興味があるなら、裏切られることはないものと確信する。